

平成21年 5月20日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号： 17592289  
 研究課題名（和文） 在宅療養者宅におけるペットの飼育状況とペット飼育に関連する疾患に関する研究  
 研究課題名（英文） Study on keeping condition of the pets and on diseases relating to pet keeping among home care patients  
 研究代表者  
 氏名（ローマ字）：岡田 忍（OKADA SHINOBU）  
 所属機関・部局・職：千葉大学・看護学部・教授  
 研究者番号：00334178

研究成果の概要：訪問看護師・訪問介護職などを通じて在宅療養者宅におけるペットの飼育の現状、問題点を把握するとともに、実際に在宅療養者宅における細菌学的な調査を実施した。その結果、不衛生な飼育状況やペットが介護サービスの提供にも影響を及ぼしているケースが少なからずあることが明らかになった。しかし、ペットを飼うことに対しては肯定的な意見が多く、療養者に対するメリットを考慮したうえでの関わりが必要であると考えられた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,100,000	0	2,100,000
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	100,000	30,000	130,000
年度			
総計	3,300,000	180,000	3,480,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：在宅療養者，ペット，人畜共通感染症，アレルギー，訪問看護，訪問介護

## 1. 研究開始当初の背景

在宅ではペットを飼うことができるが、ペットの存在は在宅療養者に良い効果をもたらす一方で、人畜共通感染症を伝播したり、動物アレルギーの原因となったりする可能性がある。今までの研究は主に獣医師などがペットにおける人畜共通感染症病原体の保有率などに焦点を当てたものを中心で、実際にペットが在宅療養者の家庭でどのように飼育され、在宅療養者との程度濃厚な接触をしているのかといった研究はほとんどなされていないのが現状であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、在宅療養者宅や在宅ケアに関わる施設におけるペットの飼育状況を明らかにし、人畜共通感染症やアレルギーなどペット飼育に関連する疾患のリスクについて考察するとともに、訪問看護師をはじめとする在宅医療従事者が利用者のペットとどのように関わっていくことが望ましいのかについて示唆を得ることを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 訪問看護ステーション、訪問介護ステーション、デイサービスに対する質問紙調査

訪問看護ステーション（以下 ST）については 2006 年 1 月の時点で WAM-NET

に掲載された関東地方1都(23区内)6県の577ヶ所に質問紙調査を行った。質問内容は、事業所については、おおよその利用者数とそのうちペットを飼育している利用者数、ペットの種類、研修の実施状況、職員については、人畜共通感染症とペットによるアレルギーの認知度、ペットに対する配慮、困った体験や問題を感じている点、それに対するアドバイス、ペット飼育の利点等についてであった。

訪問介護ステーションについては、2007年4月のWAM-NET掲載のデータより無作為抽出した関東地方1都6県の296ヶ所、デイサービスについては同じく2007年4月のWAM-NET掲載のデータより無作為抽出した千葉県内の184ヶ所に質問紙を送付した。

質問内容は、訪問介護ステーションについては、訪問看護STと同様、デイサービスについては、ペット飼育の有無と飼育状況、動物と触れ合う機会の有無、それぞれの職員については、訪問看護STの調査と同様であった。

質問紙は無記名とし、回答者ごとに個別の封筒に入れて直接研究者宛に郵送した。統計学的処理にはSPSS 15.0J for Windowsを使用した。

(2) ペットを飼育している訪問看護利用者等の居宅における細菌学的調査

試料採取に同意の得られた訪問看護利用者等の居宅の環境より試料を採取し、細菌学的調査を行った。また、同意の得られた場合は、血中の動物上皮抗原に対するアレルギー検査を実施(外注)した。

(3) 訪問看護師に対するインタビュー

研究開始時は、細菌学的検査を実施した在宅療養者宅への介入を予定していたが、訪問看護師に対する質問紙調査等の結果から、在宅という場ではこのような方法は適切ではないと考えられた。そこで、今までにペットを飼育している利用者に対する訪問看護の経験を持つ訪問看護師1名に対してペットを含めてどのように利用者に関わったのかについて、インタビューを行なった。

4. 研究成果

(1) 訪問看護ステーション、訪問看護師に対する質問紙調査

訪問看護STは事業所204ヶ所(回収率35.4%)、訪問看護師1106名より回答を得た。利用者数の平均は63.2±38.1人、ペット飼育者数の平均は11.7±12.1人、ペット飼育の割合は18.9±12.4%であった。飼育しているペットの大部分はイヌとネコで、ついでトリ、げっ歯類(ハムスター、ウサギなど)、爬虫類、魚類などを飼育していた。

訪問介護STは事業所204ヶ所(回収率68.9%)、職員481名、デイサービスは115ヶ所(回収率62.5%)、職員531名より回答を得た。回答した職員は訪問看護STでは大部分がヘルパー、デイサービスでは約70%が介護福祉士・ヘルパーであった。

訪問介護利用者のうちペット飼育者の割合は約16%であった。飼育しているペットの大部分はイヌとネコで、ついでトリ、ウサギなどのげっ歯類、爬虫類、魚類などを飼育していた。

デイサービスでペットの飼育を行なっていると回答したのは21施設(約22%)で、飼育しているペットは、イヌと金魚などの魚類が多くを占めていた。飼育は職員あるいは、職員と利用者が交代で担当しているケースが多かった。動物と擦れ合う機会を設けている施設は10%程度であった。

人畜共通感染症の認知度は、訪問看護師、訪問介護職、デイサービス職員についてそれぞれ「言葉・内容とも知っているもの」24.7%、19.5%、24.9%、「聞いたことがない」24.4%、32.0%、33.1%であった(図1)。デイサービス職員については職種により差があり、看護師は「言葉・内容とも知っているもの」40%だったが、介護職についてはその半分程度であった。アレルギーについてはいずれもほとんどが「知っている」と回答していた。ペットに対しては「接触後の手洗い」「接触の回避」といった感染防止対策を実施しており(図2)、実施状況に対する認知度の影響はみられなかった(図3-1~4)

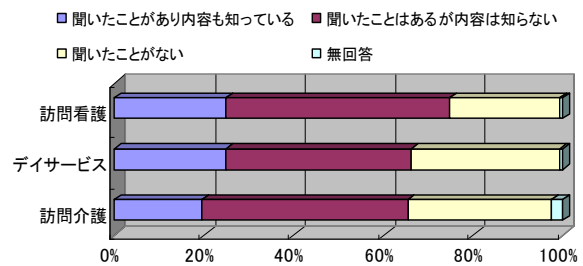


図1 人畜共通感染症の認知度

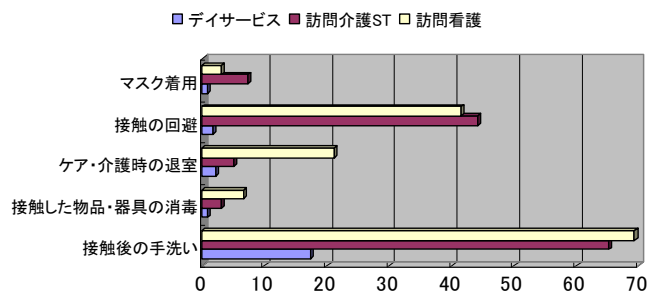


図2 感染防止対策の実施状況

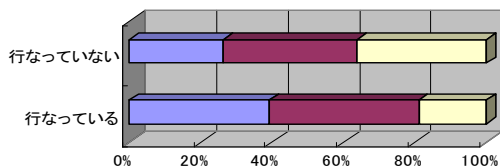


図3-1 人畜共通感染症の認知度と消毒の実施 (訪問看護師)

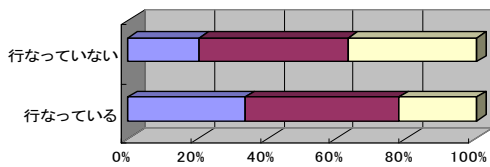


図3-2 人畜共通感染症の認知度とケア時の退室 (訪問看護師)

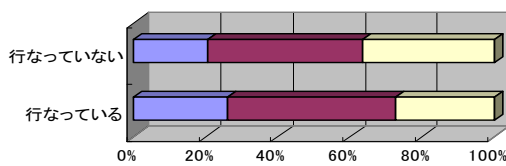


図3-3 人畜共通感染症の認知度と接触回避 (訪問看護師)

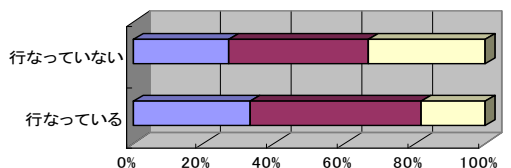


図3-4 人畜共通感染症の認知度とマスクの着用 (訪問看護師)

その一方で、在宅で適切な感染防止対策を講じることの限界についての記載もみられた。訪問看護 ST では約 40%、訪問介護 ST とデイサービスでは約 60%の事業所が、定期的に感染防止に関する研修を行っていたが、人畜共通感染症が取り上げられたことはほとんどなかった。

ペットに関してトラブルを体験したことがあるものは、訪問看護師の 54.5%、訪問介護職の 49.7%、デイサービス職員の 3.8%であり、ペットの世話を職員が実施しているデイサービスで低かった。

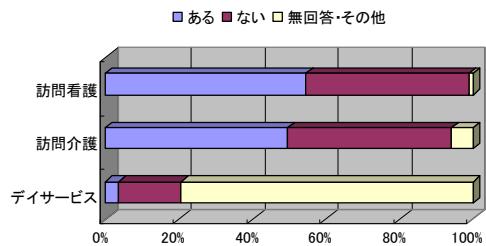


図4 ペットに関するトラブルの体験

訪問看護師の体験したトラブルを表 1 に示した。数例ではあったが、実際にペットによる感染が疑われたケースもあった。

表 1 ペットに関する困った体験はどのようなものか

内容	件数
ケア・訪問の妨げ	241
吼えられる、舐められる、臭いがかがれるなど	174
恐怖感・不愉快な思い・困惑	136
不衛生な療養環境・不潔あるいは病気のあるペット	100
毛や接触等による器具・着衣等の汚染・いたずら	77
咬まれる・引っかかる	43
アレルギー症状・かゆみ	22
利用者への悪影響	20
ペットのノミなどに刺される・ノミの発生	13
家族の非協力的な対応	4
利用者・家族との関係への悪影響	4
ペットの世話や捕獲の依頼	1
受けられるサービスへの影響・制限	4
その他	4

飼育状況については、訪問看護師の 54.2%、訪問介護職の 42.2%が利用者との濃厚な接触、不衛生な飼育環境などについて問題を感じていた (図 5)。表 2 に訪問看護師が感じたペットに関連する問題を示した。

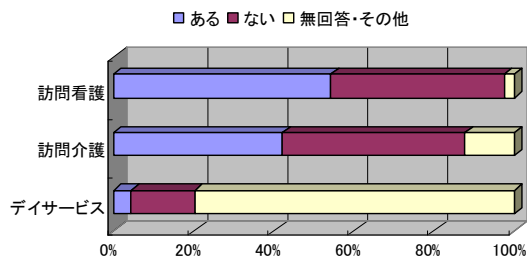


図5 ペットについて問題を感じたこと

表 2 ペットに対してどのような問題を感じたか

内容	件数
不衛生・毛・糞尿などによる療養環境の汚染・悪臭	275
利用者への悪影響	113
世話が不十分・ペットが不潔	107
濃厚な接触・節度のない扱い	104
放し飼い・自由な屋内外の行き来(ネコを含む)	104
しつけ(無駄吠え、トイレ)が不十分	92
利用者・家族の非協力的な対応・認識や知識の不足	90
スタッフへの悪影響	13
ペットの病気・高齢	11
利用者の負担	4
受けられるサービスへの影響・制限	1
その他	13

しかし、実際に何らかの提案を行なったのは訪問看護師 20.3%、訪問介護職 11.2%

で、必要性を認識しながらも立场上、あるいは利用者への配慮からできなかったものが訪問看護師 23.5%、訪問介護職 21.6%であった。実際に提案を行う場合も、利用者・家族との関係に配慮し、婉曲的な表現等を工夫していた。また提案を受け入れてもらえない場合も少なからずみられた。

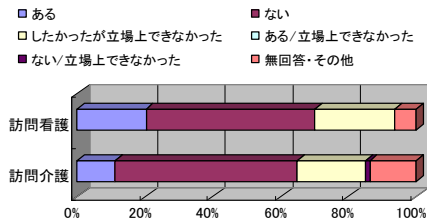


図6 ペットに関する提案 (訪問看護師・訪問介護職)

訪問看護師の多くがペットに関するトラブルの体験や問題を感じたことがあってもペット飼育は利用者・介護者に対して「癒し」「心の支え」などのメリットがあることを認めていた (図7, 図8-1, 2, 表3)。

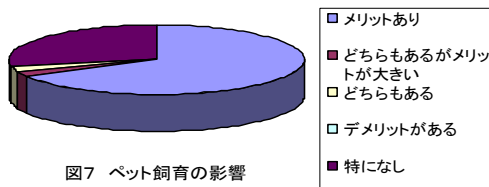


図7 ペット飼育の影響

表3 ペット飼育のメリット

内容	件数
利用者の精神的安定・癒し	504
利用者の意欲の向上・支え・役割意識	204
利用者への刺激・楽しみ・話し相手・気分転換	188
家族の一員・絆	140
療養への好影響・症状緩和・リハビリ	77
介護者・家族の精神的安定・癒し・気分転換	70
コミュニケーションの促進	47
その他	4

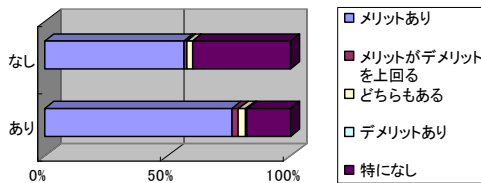


図8-1 問題点を感じたことの有無とペット飼育の影響に対する考え

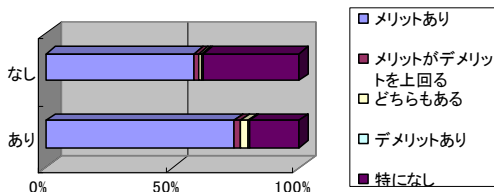


図8-2 困った体験の有無とペット飼育の影響に対する考え

以上より、ペットに対しては感染やアレルギーの原因となるものとして手洗いや接触の回避などの基本的な感染防止対策がとられていること、訪問看護師・訪問介護職の約半数近くがペットに関して何らかのトラブルを体験し、飼育等に問題を感じているものの、立場や利用者・家族への配慮から実際に何らかの介入を行うのは難しいこと、その一方でペットの存在に対しては肯定的であることがうかがわれた。利用者・家族との関係を維持しながら、どう適切なペットとの暮らし方を伝えていくのが今後の課題であると思われた。

(2) ペットを飼育している訪問看護利用者等の居宅における細菌学的調査

同意の得られた訪問看護利用者2名、ALS患者1名ペットを飼育している成人女子1名について環境より試料を採取し、細菌学的検査を実施した。

対象者の概要およびペットの飼育状況は以下のとおりである。

表4 対象者の概要とペットの飼育状況

	年齢	性別	ペット	飼育状況
1	29歳	女性	ネコ (雑種) 1匹	屋内で自由にトイレは屋内でネコ砂使用
2	訪問看護利用者 (要介護3) 96歳	女性	イヌ (チワワ) 1匹	室内で自由に飼育必要に応じてケージに収容。トイレは室内でトイレシート利用 世話は介護者が実施
3	訪問看護利用者 (要介護2) 58歳	女性 独居	ネコ (雑種) 1匹 イヌ (雑種) 1匹	ネコは屋内外を自由に行き来。トイレは屋外。世話は利用者が実施。イヌは屋外につながれている
4	ALS (要介護5) 63歳	男性 呼吸器装着,	ネコ (雑種) 2匹	屋内で自由に。屋外は庭のみで、足を拭いてから室内に入る。トイレは玄関で食器の水切りバットを利用 空気清浄機設置

対象者1についてはネコの口腔からも試料を採取した。結果を表5に示した。えさ容器や飲み水、トイレなどペットとの接触が濃厚な部位にはペットの皮膚や口腔内に由来すると推測される細菌が検出された。グラム陽性桿菌は環境由来と考えられた。対象者4は、粘着テープで頻回にネコの毛を清掃しており、ネコが濃厚に接触するじゅうたんや対象者の布団から検出された菌は50~230cfu/100cm<sup>2</sup>であった

また、対象者4は空気清浄機を使用しており、真菌の検出が他の3名に比べて少ないのはそのためと推測された。

表 5-1 細菌学的検査結果

対象	検査場所	検出された細菌	grade	
1	TV 台	CNS	+	
		<i>Micrococcus</i> spp.	++	
		GPR <sup>a)</sup>	±	
		CNS( <i>S. epidermidis</i> )	++	
		GNC	±	
		真菌、2 種類	±	
	机	GNR <sup>a)</sup>	+	
		GPC	+	
		GNC	+	
		GNC	±	
		<i>S. xyloso</i>	+	
		真菌、3 種類	±	
	フローリング	<i>Sphigobacterium multivorum</i>	±	
		<i>Micrococcus</i> spp.	±	
		<i>S. epidermidis</i>	+	
		真菌、3 種類	±	
	ベット上	<i>S. intermedia</i>	++	
		GPC	+	
		GNC	+	
		<i>S. epidermidis</i>	+	
		GNC	+++	
		真菌、3 種類	±	
	えさ容器	CNS	++	
		<i>A. baumannii</i>	+++	
		真菌、2 種類	±	
	ネコ肛門周囲		<i>E. coli</i>	+++
	ネコ口腔内		<i>Pseudomonas</i> spp.	+++
		<i>Pseudomonas</i> spp.	+++	
2	利用者居室 (たたみ)	<i>Pseudomonas</i> spp.	±	
		真菌	±	
	ペットの寝床	<i>S. saprophyticus</i>	±	
		GPC <sup>c)</sup>	±	
		GPR	±	
		真菌、2 種類	±	
		<i>Pseudomonas</i> spp.	±	
	ペット飲み水	CNS	±	
		GNR <sup>a)</sup>	±	
		真菌	±	
	リビング(じゅうたん)	<i>S. caprae</i>	±	
		真菌、2 種類	±	
	えさ容器	CNS	±	
		真菌、2 種類	+	
	3	えさ容器	GPR	±
GNR <sup>a)</sup>			±	
<i>S. haemolyticus</i>			++	
GNR <sup>b)</sup>			+	
GPR			++	
糸状真菌			+	
<i>Penicillium</i> sp.			±	
<i>Scopulariopsis brevicaulis</i>		++		
利用者寝室		GNR	++	
		GPR	+	
		真菌	±	
	真菌	±		
4	じゅうたん (ベッド脇)	GPR	±	
		<i>S. chromogenes</i>	±	
		<i>S. chromogenes</i>	±	
		GPR	±	
		GPR	±	
		GPR	±	
		GPC	±	
		計	+	

表 5-2 細菌学的検査結果 (続き)

対象	検査場所	検出された細菌	grade
4	呼吸器の上	GPR	±
		CNS	±
		CNS	±
		計	±
	ふとん(脇の部分)	GPR	±
		GPR	±
		CNS	±
		その他	±
		計	+
	ふとん(脚の間)	GPR	±
		GPR	±
		CNS	±
		その他	±
	廊下(フローリング)	GNR	±
		GPR	±
		GPR	±
		その他	±
	吸引器の上	GPR	±
		CNS	±
	トイレ用きりバットの網	GPC	+
		GPR	±
		<i>Micrococcus</i> spp.	+
		酵母様真菌?	+
		GPR	±
	トイレ用きりバットの底	GPC	++
		GPC	+++
	テーブルの上	同定できず	+
同定できず		±	
GPC		±	
同定できず		±	
餌入れ A	GPC	+++	
	<i>S. caprae</i>	+++	
餌入れ B	<i>S. saprophyticus</i>	++	
	GPC	++	
飲み水	GNR	+	
	<i>S. warneri</i>	±	
	GPR	±	
	GPC	±	
居室の空気	GPC	±	
	GPR	±	
	GPC	±	
	CNS	±	
	その他	±	

± : 100 > CNS : コアグラウゼ陰性  
 + : 100~1000 ブドウ球菌  
 ++ : 1000~10000 GPR : グラム陽性桿菌  
 +++ : 10000 < GNR : グラム陰性桿菌  
 GPC : グラム陽性球菌  
 GNC : グラム陰性球菌

対象者 1 と 4 は動物の上皮抗原に対する IgE 抗体を測定したが、2 名とも何年もネコを飼育しているにもかかわらず対象者 1 はクラス 1、対象者 4 はクラス 0 でアレルギーは認められなかった。

(3) 訪問看護師に対するインタビュー

以下の 4 つの事例についての関わりについて録音データから逐語録を作成した。以下に各事例の概要と訪問看護師のかかわりを述べる。

<事例 1>

利用者 70 代女性、糖尿病性網膜症による視力障害、脳梗塞後遺症による半身麻痺と言語障害あり。主介護者である娘と二人暮

らし。非常に不衛生でゴミの充満した室内で、4匹のネコを飼育。家中がネコの排泄物だらけで、ネコは、利用者のベッドにも上がり、添い寝。しかし、日中独居の利用者にとってはネコが精神的支えになっている状態。訪問看護師は、状況をそのまま受け入れた。

#### <事例2>

利用者は神経難病で寝たきり状態の女性。介護者は夫。動物が好きでないが、妻が大切にしていたという理由でイヌ2匹を必死で世話。イヌの病気も重なり、室内は非常に不衛生な状態になる。しかし、日中独居の妻にとっては、ペットの立てる様々な音は慰めになっていた。この事例ではイヌがネックになり訪問看護の継続を躊躇していた。これに気づいた訪問看護師は積極的にイヌとの関係作りを行い、訪問看護の継続が可能になった。

事例1と2のように不衛生な状況であってもペットの存在が家族や利用者にとって意味があるのであれば、訪問看護師はそのままの状況を受け入れて、ペットとともにその家族があることを支援することが重要である。

#### <事例3>

既に4匹も室内犬を飼っている娘の家庭に夫の介護のために利用者夫婦が同居。利用者にとっては屋内にイヌが居ること自体が受け入れがたい。イヌのしつけが悪く、少しのことで激しく吠え続ける。訪問看護師に対しても娘とイヌに対する愚痴をぶつける。しかし、娘も子どもの受験、親との同居などストレスフルな状況が重なっていた。娘との言い争いの際に立ち上がった拍子に脳出血を発症し、逆に自分が介護される立場になる。実の家族同士は言動がストレートで、それがさらにストレスを生む。訪問看護師は別居を提案するが、実の娘に面倒をみてほしいというのが真意であることを知り、どのようにしたら娘の飼っているイヌを受け入れられるかをいっしょに考えていった。

興奮して吠え続けることがイヌにとってもよくないのではというように飼い主の立場に立って伝えることで、訪問時にイヌを別の場所に移動しておくように配慮してもらえた。

#### <事例4>

利用者宅のイヌが激しく吠え、全くなつかない状態。ケア時には別室に移動しておいてくれた。訪問看護師は危害を加えなければ咬まれないと思っていた。しかし、忘れ物をとりに戻ったところを咬まれ、蜂窩織炎を発症。以後ペットの居る家庭を訪問する場合は、あらかじめペットの性質を把握し、訪問時のルール作りについて話し合

っておくこととした。

インタビューの内容については継続してさらに詳細な分析を行なう予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3件)

- ①岡田忍、西尾淳子、在宅療養の場におけるペット飼育の問題点について—訪問介護ステーションおよびデイサービスの質問紙調査から—、第12回日本在宅ケア学会学術集会、2007年3月16日、東京都千代田区
- ②岡田忍、鈴木明子、西尾淳子、印田宏子、訪問看護ステーション利用者宅におけるペット飼育の実態について—訪問看護師がみたペット飼育の問題点と利点—、第11回日本在宅ケア学会学術集会、2007年3月4日、埼玉県越谷市
- ③岡田忍、在宅療養者宅におけるペットの飼育状況について、第10回日本在宅ケア学会学術集会 2006年3月4日、新潟県上越市

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

岡田 忍 (OKADA SHINOBU)  
千葉大学・大学院看護学研究科・教授  
研究者番号：00334178

##### (2) 研究分担者

西尾 淳子 (NISHIO JUNKO)  
千葉大学・大学院看護学研究科・技術職員  
研究者番号：30396692  
鈴木 明子  
千葉大学・大学院看護学研究科・助教  
研究者番号：70241974  
亀井 克彦  
千葉大学・真菌医学研究センター・教授  
研究者番号：10214545

##### (3) 連携研究者

印田 宏子 (INDA HIROKO)  
千葉大学・大学院・博士後期課程  
小川 俊子 (OGAWA TOSHIKO)  
千葉大学・大学院・博士後期課程